

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和8(2026)年
4月号
通巻668号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和8年4月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷製本
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



3月7日の大倭会文化講演会の後の交流の家での打上げ会で (齋藤正宏さん撮影 文6、7頁)

座談会・法主を困んで (再編集版)

みそぎ 禊を通して生き方を考え直す (第1回)

法主 矢追日聖 (満64歳) 他

今回掲載する座談会は昭和50年7月1日に行われました。今回の記事は、昭和50年7月号の本紙で「みそぎ、ことだま、いのち」と題して要約的に載せられたものと、平成12年9月号から平成13年4月号の間に「みそぎ、禊を考える」として連載されたものの再編集版です。テープから起こしていない部分も再現し、今の時代であるからこそ考え直すことが必要だと思われる「禊」について考える材料を提供することにしました。じっくりと読んでください。 編集部

座談会を始めるにあたって

杉本順一(司会) 禊会が昭和43(1968)年5月から始まって、この昭和50年7月で87回目になります。

禊会といってもさまざまなもの考え方、立場の人達が集まっていると思います。今日は禊会とはどういうものなのかという事で、難しい事を言うんやなしに、自分と禊会の関わりを話してもらいたいと思います。

今、日本人なら禊という言葉だけは知ってる人も多いんですが、その禊の実態は把握できてないようです。また、これが禊だというものがあのかないのか、それも分かりませんが、人間がさまざまなる事をこれから先もやってゆく上で、禊というものがどんなふうな意味をもって来るのかという事に非常に興味があるんです。

なぜかという、今まで人間が自分達

の事を考え、自分達の将来をこうあるべきだという事を知識でいろいろ考えて来たわけですが、未だ自分達の道を発見し得ない世界ですわね。そんな中で逆にそういった観念を固定せずに、知識でなく知恵というんですか、その知恵みたいなものを自分の中に見出す一つの方法として禊というものもあるんじゃないかと。これは僕の解釈ですけども。そういう意味で、知識だけに偏り過ぎた人間が、新しい人間を発見する一つの方法として禊がもっと本質的なものであって欲しい。

ただ水被って禊というんじゃないに、人間個々人の持つて自分の本当のものをつかみとることによって、新しい人間関係やいろんな社会の一つの動きの元になるようなきっかけをつかんでみたい。今まで知識で、例えば哲学なり一生懸命考えて来た事が、それほど人間にとって具体的に救いの道を示してくれたとは思えないんです。それは宗教においても、観念的にいろんな事を信仰する事によって、人間が救われたかどうかというのは非常に疑問です。個人的には救われた気分になっても、全体の社会そのものが非常に沈んでいてるんじゃないかという感じがします。今日は、禊というものをもう一回見直してみたい。

本当はこういう禊会から始まって、日本にあるいろんな禊の実際を取材してその本当の禊をもう一回掘り出したという気持ちがあるんですけどね。とても今時間的にも余裕がないし、今回は大倭の禊会を中心にして考えていきたい。僕はこの編集部というのを抜きにして、自分自身でここに大倭に来て10年になって、いろんな「みそぎ」というか、いろんな意味で自分自身を考え、また一緒にみんな考えていきたい。

まあ座談会というよりもっと真剣に、自分自身の事を考えたいと思う気持ちもありますので、

自分と禊という事を、人様はとにかく私はこうなんやと言ってもらった方がね、それぞれの本当の心根が分かかって、新しい禊の道を発見する事になるかも分からへんと思えますので、ひとつよろしくお願いします。

禊とは何か

法主 話し順序として、昔を思い出したらいいと思うんや。(昭和43年4月発行の『すさのお』19号の「みそぎの会始まる」〈①〉と、同年5月発行第20号の「第1回みそぎ会―みたままの記」〈②〉を読まれる)

① 《『すさのお会』発足の後日、大倭の古株、神野主計さんの一言から、すさのお会の会員を中心とした人々の間に、ヤマギシ会流の研鑽と大倭という霊動を中心とした「みそぎ」などを行い、そういったものを十分に活用して、興味本意ではなく、本当の自分の姿をみつけ、すべての人々と仲良くなる自分にしていくための行事をもちたいということになりました。

「みそぎ」は古代の日本では普通に行われていた行事なのです。「みそぎ」とはツミソギとミイゾソギを一つにしたものといえます。ツミソギは、自分の心のアカ、つまり心の中にある「きめつけ」をいい、ミイゾとは神さんの心を指すのです。

だから「みそぎ」によって、とらわれた心をとれば、神さんの心が出てくるということであり、これが自分の本当の姿に近づいていく第一歩です。

霊動には魅力を感じる人も多いでしょうが、本当のネライをはずさず、興味本意を捨てて、本当

の自分を見つげるための価値ある会を催してもらいたいものであります。》

② 《既報の通り去る5月11日夕方6時より、大倭に於いて、すさのお会提唱による第1回目の「みそぎ会」が催された。総勢あわせて50名。最初の催しとして、一同かなり興味深々というところ。開会にひきつづいて日聖法主のみそぎに関する話があった。左記は当日、参加者に手渡された「しおり」の概要である。

〈みそぎ〉(禊)

神ながらは言挙げせざりし故に形をもって古事を伝承してきた。今も尚神社にはイワクラ、ヒモロギがご神体としてまつられてあるが、宇宙創成の理をあらわしている。伝承である「しめなわ」「拍手」などをはじめ正月、結婚式の神事にはこうした形の伝承が生きているが、これらは陰陽一体、相對即一体をあらわしている。

ところが、現在の「みそぎ」は古代から行われていた「みそぎ」から逸脱している。水をかぶり、神にいのるのみそぎだと解されているが甚だしき誤りである。「みそぎ」とは「つみそぎ」と「みいずそそぎ」の重なったのを語源としている。「つみ」とは「つつみかくす」ということであるから「つみそぎ」とは「神の心をつつみかくしている、まが罪をそぐ」ということである。そうすれば「みいず」とは「神のおかけ」ということであるから「みいずそそぎ」とは「神のおかけがそがれる」ということである。

こうして、神の心をつつみかくす、まがつみをはらい浄め自然の氣に帰っていくのが「みそぎ」であり、古代では山のせまった川原などで行われた。

このように「みそぎ」とは言っても、大倭の「みそぎ」は世間のそれとは全然異なったもので

あることをまず知っていたきたい。それと共に誤解され易いことは、みそぎ会にのぞめは、簡単に霊動が起るものと早合点することである。この早合点があったため、この日のみそぎ会の前半は少なからず、人々に失望の感を与えた。こうした席にのぞんで感じられたことは、このみそぎ会に於いて、霊動というある神秘体験を期待しながら折角の日聖法主の講話の内容を、深く考えてみようとはしなかったことを残念に思う。

ところで大倭で開催される「みそぎ」の会には、次の要旨が含まれていることを特に述べておかなければならない。それは、「みそぎ」とは本霊をつつみかくしているが罪をそぐと共に、自分の靈魂の分量を自分で知るといふ計量器の役をするものである。物を計る秤はあるが、靈魂を計る秤は、「みそぎ」という方法ではない。

参加者にはおわかりのことと思うが、後半、奈母太加天腹と連唱する太祝詞につれて、動いた何人かが、法主をとりまいて顕現した状態の中に、本霊と本霊との交流があり、この交流の中から自己を知り、法主の靈的価値の偉大さを語る仕組みがある。前半の期待はずれが予期せぬ変化を見せて暁をむかえた。霊動はする人もあれば、しない人もある。また霊動する人にもする「時期」がある。》

以上これは編集の人が書いてくれたんやと思います。こんなことが当初にあったので、一応昔を思い出す意味で、今これ読ませてもらったんやけども参考にしてもらったらいいと思います。それでは森下さんからポチポチ進めてくれはったら。

それぞれにとっての禊会

森下新蔵 私も禊会は最初から来させていた

てるんだけど、禊ということについて、未だに自分でできてないということ自体が、自分でも恥ずかしいくらいやねんけども。この自分の枉罪かたがみを取るということが禊会の一歩の目的ってことやねんけど、自分でそれ取れてんのか取れてないのか、はつきり分かっていない。

夜の10時に集まってね、11時頃から始まって、現在の禊会のやり方を観察していると、漠然としていて、自分の罪とかを破うという感じじゃないわな。夜も更けてくると振魂の行ぎやうということになって、名古屋の山田(八重子)さんが霊媒で霊界から、例えば今井(富蔵)苑長さんが出て来て、その声を聞くとかになりますわな。

私、法主さんがおっしゃる事は、全面的に信じるといふ、この気持ちは全然変わりませんけどな。霊界から死にはった人が出て来て、霊媒する人の口を借りて、我々に分かり易いように言うてくれはると、それはもう信じますねん。自分ではね。疑い深いところが多いんですけどね。自分では霊動ひとつするやなしね、そういう事は全然分からんけども、法主さんのおっしゃる事を長年聞いてると、分からんながらに、自分ではピンと響いて来る。

そやさかいに、霊界に行ってる人が、今、霊界でこういう事思ってる、仮に今井苑長さんの話して言うたら、自分が霊界へ行っても菅原園の事をいつも気にしてる、頼むでという声を聞きますやろ。(※当時森下さんは菅原園の厨房で仕事をしていた)その点はピンと響くわけだ。これは本当に苑長さんの言うてる言葉やと、そういう事は疑いもせんと全面的に受けるという気持ちは全然変わりやしませんのやけどもな。

水野勝美 まあ、禊会に来た時でも聞くばかりですんけど、それだけでもある程度自分の中で、

モヤモヤと心の中にある事と一致する事ありますわね。そんな場合は自分の罪を破やぶられてるんですかね。また法主さんや来てはる人の話し聞いて、どこかやっぱり聞いた事は残ってるから、それを日常生活の中で、あ、こんな時はああやって過あやしたらいいという事もあります。

それで禊会に出た時はね、モヤモヤした気持ちは全然ありませんけども、一歩大倭から出たら、やっぱり自我というのが抜けてまへんのかな。そんな簡単に抜けたら、ここへ来る必要もないし、まだ僕も若いしね。自分の意見も発言せなあかんのやけど、どうも喋りにくいんですね。口べたというか、ざつくばらんと言ったらええんやと言わはるけど、ちよつと言葉の一つ一つに、ええかっこしたいから、どういう時も喋りにくくなるんです。そやから、いつも話さんならん事が来る度に、こつんこつんと当たって、自分の心の中を見抜かれていような気がしますわ。

とにかく一回でも多く出席出来るように、また皆さんと仲良う出来るよう心掛けて寄せていただいてるおかげで、だんだん心の中のモヤモヤもとれていけば、だんだん体の調子もよくなつて来る。それも禊でミソガレていくというか、お徳をいただいてるんやなあと思います。

安藤勇 禊っていう場で皆がああやって話してきて、それぞれのその枉罪を洗い清めるといふまでは私は望んでないんです。そこまでまだ自分が行ってないし。私は禊というものを、ツミを削いでミイズを注ぐという事で捉えるならば、何も禊会という場に限って、というものがあべきじゃなくて普段毎日の一瞬一瞬の中で、それがなかったら、だめなんじゃないかという感じがある。

だからあそこでは霊動を起こすことはないだろうと思うわけ。法主さんが何かに書いてあるん

ですが、その天地の恵みに感謝して、静かに座つてるとおのずと霊動が起こるっていうふうな感じがあって。いずれなるようならなるやろし、ならんもんやったらならんやろし、ああしようこうしようという思惑はね、禊に臨む際には全くないですよ。

禊会に出て最初の頃は、これはおかしいとか、なんでこんな事が起こるんやろとか、いろんなわだかまりがあったんです。回を重ねることで、今では、それも余りないんです。

今一番気になっている事は、自分の役目、命が分からなくて、釈然としない。しかしそれを禊によって、一気に決めて解決するような姿勢ではなくて、日常の中で、いずれ分かるものなら分かるだろうという気持ちで大倭にいます。禊会も一つの区切り、アクセントという感じで毎回寄せてもらってます。

青山日元 自分自身、行かないかんとかいいうんじやなしに、ただポヤーツとひとりで行っている感じですよ。

ちよつと話が芯から外れるのか、本筋になるのかどうか知りませんし、法主さんが言うてはった言葉どおりよう言われへんねんけれども、まあ私流に言うたら善も悪も無いというんですか。

私は自分の気持ちに合わんなら、「あいつあかん」「こいつはええ」という具合に、善悪観で何事でも決めつけていく方やらね、どこまでツミソギとミイズソギになってんのか分かりません。そんな気持ちで自分の内側にある間はね、おそらく、めったに真実らしいものはつかむ事もできないうちやろと思ってます。この会でも、きれいな事を並べるよりもね、むしろ自分の中にある、きたないもんというか、いやらしい気持ちみたいな、そういうもんこそめつと何らかの方法によって、

訓練というんですか、出していかなあかんなど思っています。

よく言われてきたことは善も悪も神さんの意思によって作られている。それによって、やっぱり自分たちがその神意というか、その真実とか、冷静に見極めていかないかんあつと。まあできれば自分もたとえ一歩でもそうなりたいたいなど。どこまで続くかわかりませんが(笑)。

岸野春子 禊という事は、いつも生活をしてゆく上で気持ちの中にある事です。以前は禊会に行つて反省せなあかんとか、霊媒を通して聞く世界にも興味ありましたが、最近はどうも向上しようとかさしせまつて思わないし、あの人がああ言うてはる、ああいう見方や意見もあるんか、というような聞き方をしています。

結局、私は霊界のような世界はよう分からんし、それを分かつたというふうにはならないで、まあ分からなかつたら分らないでも生きてゆけるように、神さんは恐らく仕組んでいるのだろうと。自分の人間としての気持ちで、やっていける範囲でやっていったらええのやというような気持ちです。霊界のこととかね、霊媒の話とかにそうも興味がないんで。その代わりに霊媒が言わはるから言うて特殊なことのようには聞かないです。

矢追鈴月 今は本当に気楽で何にもありませんね。まあ初めは、「こつでなければならん」とか「こつあるべきや」というような、そんな気持ちが多分ありましたから、出席するたびに、随分しんどかった。最近はあるまり気にならんようになりしましたな。

反保香須弥 禊会に出席してる人、例えば法主さんやカア(鈴月)さん、日元さんとかとお話ししてたらな、直接禊会に出席せんでもその影響は受けられて、間接的に何か学べるのと違うんかな。

鈴月 それやったら、限られたもんだけになってしまうけどな。皆はどう思う？ 私は雰囲気ちゆうもんが大事やと思う。

香須弥 そやけど、うち、行きにくい。何か入りにくい感じがある。一回だけちょこつと行つた事あるやろ、一年位前に。

鈴月 カアちゃん(※自分)なんか、初めはね、さつきも言うたようにね、禊会ではいろんな話が出るわな。我がに合うような話しやたら必死に耳傾ける。逆に我がとはちよつと違う話してたらどうも聞きにくい。

カアちゃんなんか、こつあるべきやと思てるもんがあるやろ、耳はどうしたかて傾けなならんもんやと。だから相手の人が話してんのやから、まじめな態度で聴かんならんと。すると横で、ごしょごしょ言うてたら、まじめに聴いたらええのにと思つてイライラツとなつて、もうその人の話し聞いているやうで、気持ちはあつち行きこつち行けば、何しに禊会に来てるんやら分からへん。

それがね、今ではいつの間にかやらあんなり気にならんねん。自分にピシツと来る話しやなかつたかて、あの人はああいう考え方なんやなという感じで、気楽になつて来た。

岸野 私は、どつちでもええけどまあ禊会に行こかというふうな傾くやろ。ポンちゃん(杉本順二)なんかは、すぐ興味ある言うてはるのに、禊会にはめつたに出えへんやろ。ああいういき方もあんのやなと、おもしろいなと思うんやで(笑)。

鈴月 香須弥は若いんやし、食わず嫌いはどうかと思うよ。ちよつとこつ食つてごらんよ(笑)。

香須弥 昔は行きにくかつたけど、今は別に行かんんとは思てへん。何か禊会は余り関係ないというか、自分の生活と切り離れた感じがしてる。

(続く)

あじさいの花々

——紫陽花邑の活動紹介(第2回)

押し絵教室

お正月気分が少しずつ落ちてきている頃に「押し絵教室」を取材させていただきました。

大倭会館でされているとのことだったのでお邪魔すると、もうすでに高濱先生と5名の方が押し絵に取り組んでおられました。後で2名の方が来られました。



高濱道子先生

高濱道子先生(師範名 峰寿)は「押し絵の御所流」(※)の免状を持たれています。

私も知らなかった押し絵の歴史というものを見てみると、平安時代の貼り絵に始まり、江戸時代に宮中や大奥の女性の手芸として発展したもので、歌舞伎役者などを題材にした押し絵が継承されている伝統工芸です。綿を包み、立体的に仕上げるのが特徴で、子板以外にも雛人形や壁飾りなどの多様な作品に応用されているそうです。

先生が大阪府堺市に住んでおられたところに、且田容子さんと湯浅晴子さんなどの関電グループで色々な活動をされていた時に、且田さんが堺の自宅に高槻市在住の押し絵の先生、林俊子さんを呼

んで来られ、その先生の元で師事され「押し絵」を習得されたようです。

奈良の田原本町で公民館活動の一つとしてやってこられて以来38年、その頃は20名程の生徒さんに指導され、公民館で教えられなかった生徒さんを1日4名程自宅に招いて指導されていたようです。

私も取材で見せていただきましたが、生徒さんは先生の作られた型紙をよく確認しながら、ボール紙でパーツを作り、正絹などの布を綿でくるんで立体感を出され、顔や衣装の細部を描き込むという技法で一つの押し絵が完成するように丁寧に取り組んでおられ、お互いに分かりにくいところなどは教えあったり和気あいあいと学んでおられました。それを先生は優しく解りやすく指導されていました。でも難しいお顔などを描くのは先生がされているようです。細かい作業が苦手な私にも素敵な押し絵を作ってみたい気持ちはありますが、少し程早くも感じました(笑)。



でも完成したら素敵な作品になること間違いなしの気持ちを改めて実感するんだなと思いました。

先生は型紙の下絵も自身で全て書いておられ、お顔が一番難しいと言われていました。

使用する布も色々な種類を用いるので、昨今使用できる布探しが大変のようです。その他の材料も色々工夫されて作

り上げられているので、完成した作品には愛着が入だと感じました。これからも素敵な可愛い作品を作り上げてください。

※注記 「押し絵の御所流」とは、京都御所(皇室)に由来する、雅やかで格調高い、立体的な布製の人形細工(押し絵)の技法や様式を指し、特に伝統的な宮中文化や雅な美意識を反映した、繊細で美しい仕上がり特徴の御所人形の流れを汲む、格式高い押し絵のスタイルを指します。ただし「御所流」の家元とは現在は離れていて、自分の押し絵スタイルで高濱先生は教えられているようです。

教室は毎週第二金曜日、9時半〜12時まで大倭会館内です。

習ってみたいと思われる方は、ぜひ一度教室を覗かれてはいかがでしょうか。

(取材)文/中村千久佐・写真/岸田哲



大倭会文化講演会(3月7日実施)感想文

「小さな友情の物語を

紡いでいきたい」

NPO法人むすびの理事長 青山 哲也

紫陽花邑にある交流の家は、ハンセン病快復者の方が泊まれる社会復帰セミナーセンターとして1967年に竣工した。後に加藤登紀子さんの夫となる同志社大生・藤本敏夫さんも、この運動の初期に関わっていた。

加藤さんの講演のテーマは「あらゆる分断を超えて——『交流の家』と私の縁を語る」。加藤さんが生まれた満州のこと、藤本さんとの出会い、チェルノブイリ原発事故や東日本大震災と原発事故、ハンセン病や韓国・濟州島の虐殺事件などは多岐にわたった。それぞれの話のなかに、加藤さんの思いの伝わる言葉があった。

加藤さんの学生時代、東京大学では安田講堂に学生が立てこもり機動隊に石を投げるような時代だった。そのとき藤本さんから学生集会で歌をうたって欲しいと頼まれたが断った。どちらかのためだけに歌をうたうのは違うと感じたからだ。「人々は分断されたくないのに、分断させられている。歌は分断をくぐり抜ける、乗り越える、融和させる。手をつなぎ、抱きあうために、歌がある」と加藤さん。

この日はアメリカがイランに対する戦闘を開始して一週間ほどしか経っていなかった。多数の女子児童が犠牲になったという報道もあった。「ポタンひとつで他の国を攻撃しているのを見ると、爆撃して潰していいのかわからない。どうしたって私たちは絶望しちゃう。私は絶望しないために、きょうここに集まっている」といい、交流の家やワー

クキャンプの運動について、「こんなに長い間、60年以上も、ワークキャンプでたくさんの方が出会った。いろんな人が救われたり、誰かをちよつと助けたりできた。その活動はまだ続いていて、これからも続いていく」「大きな声で大きな力を手にした人がすることよりも、はるかに無力だと思われている小さな人が、小さな力で、そつと命を支える。それが私たちのこれからの未来の世界かなと思っている」「愛情にあふれる関係を紡いでいくことが大事。それを絶望しかかっている人にも伝えたい」と私たちを励ますように語る。そして、「国を越えて生きていくことは本当にいろんな意味で素晴らしいことであるはず。国境線は人を隔てるものではなく、素晴らしい出会いをもたらすものであるべき」とも。ワークキャンプではこれからも国境線を軽々と飛び越えて、人とつながる活動を続けたいと思う。

講演の間には、歌をうたい、詩を朗読された。ひとつは韓国・濟州島であった虐殺事件(4・3事件)について加藤さん自身が書いたもので、会場にはその詩をハングルに訳された詩人の金時鐘さんも来場されていた。加藤さんと短いトークをされた金さんは「人がつながる、関係が続くというのは、そのように生きようとする人を通してしかつながらない。年月が経っても、またこうして出会ってみたら、同じ場がつかないでいたということ」「市民とか民衆は負け続けることをやめたときは決定的な負け。じつとして分断は乗り越えられない。負け続け通すことだ」と語られた。今回の文化講演会のメッセージを十二分に表すことばだった。

大きな力を持つものが、自分のためにその権力を使い、ひとの命を奪う光景を目にする毎日だが、決して絶望することなく、これからも交流の家を

拠点に、ひとと出会い、ともに汗を流し、小さな友情の物語を紡いでいきたいと思う。

つながる縁——大倭会文化講演会

神奈川県 藤澤 美恵子

「おはようございます。お迎えにあがりました」。3月7日の朝、加藤登紀子さんの宿泊ホテルに向いて、初対面の挨拶をしてから、この日一日、登紀子さんに一緒に連絡役を務めるのが私の役目だった。

当日、会場の拜殿や駐車場の準備、案内板設置や備品搬入など、朝8時過ぎからたくさんの方々が出てきざりと動かれています。登紀子さんは10時過ぎに到着され、交流の家や邑の中を巡って、熱心に説明を聞いておられた。まるで学生時代の故藤本敏夫さんの姿を追い求めておられるかのよう……。

昨年6月、初めてハンセン病療養所「長島愛生園」を訪れた登紀子さんは、入所者の石田さんから、若かりし頃交流の家の建設キャンプに参加して、学生達と一緒に「知床旅情」を歌ったと聞き驚く。何しろ彼女がその歌を知ったきっかけは、歌手デビューした頃、当時学生運動の活動家だった藤本敏夫さんと出会い、二人きりの場で、夜空の下、彼が朗々と歌って聞かせてくれたのがその歌。「とつてもカッコよかったのよ」と語る登紀子さん。

夫の藤本敏夫さんは、学生運動に身を投じる前は、同志社大学入学後、FIWCのメンバーとして交流の家建設運動に関わっていた。↓そしてそのキャンプ地が大倭紫陽花邑であり、彼にとつては心の故郷であった。↓そのキャンプで「知床旅情」が歌われていたのだ。

石田さんの話を聞いて、すべてはここに繋がっ

あらゆる分断を超えて—
「交流の家」と私の縁を語る
講師 加藤 登紀子 氏



「来ています」と伝えられたこと。講演会後の打ち上げの食卓には、手作りのちらし寿司があって、その米は、千葉県鴨川市で農業をしている首藤（旧姓宮田）武宏さんからの差し入れだったこと。彼もFIWCのメンバーで、一時藤本敏夫さんが設立した「鴨川自然王国」で働いていたことがあり、登紀子さんの関係者の方とは知人であること……. どんどんつながる縁。50数年前、FIWCに加わり、交流の家を拠点に活動し、大学卒業後は大倭の「県立菅原園」で職員として1年半働かせてもらった私も、このつながりの一端に……. オトキさんの魂の歌と語り、心にしみました。ありがとうございます。

ていたと思いきや、今回の講演会は、絶望しないために来たと話された登紀子さん。リハーサルの時、登紀子さんの関係者の方と話をしていたら、昨年、鳥取の「野の花診療所」の23周年記念コンサートに行った話になり、すぐその場で徳永進医師（FIWCメンバー）に電話され、「今日は大倭

味わい深い講演会

神奈川県 日比野 純子

土曜日は味わい深い講演会兼コンサートに参加

させていただきありがとうございます。加藤登紀子さんのファンというわけではなく、まだまだ参加できる日程だったので、佳い会に出る縁を頂いたと思っております。地下水のごとく、と聞いた事がありますが、色んな繋がりがあるんですね。加藤さん、素晴らしい方、菩薩さまってあんな風に笑われるのかも、と思つて拝顔しておりました。甲野善紀さんや山極壽一さんの会は参加出来ず残念に思つておりましたが、いつも感慨深い会のご提示ありがとうございます。『おおよまと』は楽しみに読ませていただいておりますが、縁の深い会員ではありませんので、ろくに挨拶もせずに参加させていただき、失礼致しました。お礼のみにて失礼致します。

時の波蕩 (その25)

法主帰幽30年に寄せて

京都府八幡市 林 修 三

法主が帰幽されて30年の歳月が過ぎた。誠にありがたいことに大倭に私が縁を結んだこの30数年間に、平均して月に7・8日、年にして100日近い日々を大倭に通わせていただいた。楽しく、嬉しく、有り難い日々だった。その間、自身の家移りは7回にも及んだが、いずれも片道2時間近い距離を、ほとんど苦に思うこともなく通い詰めた。いや、「詰めた」は違っている。そんな大層なこともなく自然に通い、いつの間にか多くの回数になっただけだ。

何がそうさせたのか？ 法主が好きで、大倭にかかわる大勢の人々のその誰もが好きで、つまりは紫陽花邑や大倭神宮が好きでそうなったんだと

思う。居心地がよかつたんだと思う。居心地？ そう、こんなに当たり前に霊界と現界が一つになって暮らせる場所は、この世にはほとんどないのかもしれない。

それがありふれた日常になっているようなところは……. 理屈はいらない。ただそのような生活がそこにあるから。議論もいらない。ただそのような空気が邑に、神宮に流れているから。もちろんその生活の中には悩みや怒りや不満でさえ渦巻いているのは分かる。でも、世間のそれとは確かに違う。俗に言う聖人や悟つた人や英雄もいない。ただ、みんなが各々の個性を持ち寄つて、問題を抱えながらも各々の役割を果たしている。誤解もあれば争いもあるが、心からの憎しみや拒絶は皆無だと思う。

それぞれ、人の好き嫌いもあるが、いずれそれもここでは溶けてゆく。対立も嫉妬も争いも還元帰一して笑いへと変わっていく。それこそが真の平和境。

ちよつと誉め過ぎだけど、30数年間邑の空気を吸わせていただいた今の僕の偽らざる思いだ。法主帰幽30年を共に迎えることの出来た事への感謝を込めて、この雑文を『おおよまと』紙に捧げた。

2026年 1月26日

法主・言の葉



流されつつも流れ方は自己本霊が指示するものであるから、私はアホでよいのだ。

あじさい日誌

3月8日 午後2時から大倭拝殿において大倭会主催の祓会が開かれました。参加者14名。久しぶりに10名を超えました。

3月15日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

3月20日 午前7時半ごろから大倭神宮にいられたという熊本県の出口秀臣・志穂さんが掃除に行かれた高橋良美さんに案内されて紫陽花邑にいられました。

3月20日〜22日 交流の家でキッズキャンプを開催。幼児から中学生の子どもたちが楽しく過ごしました。

3月23日 午後2時から大倭大宮の月次祭が行われました。この日は昭和38年3月23日の法話をお聞きしました。

3月28日 青森の高橋延之・末子夫妻から今年も紫陽花邑に「行者ニニク」をたくさんお送りいただきました。

群馬から来邑の櫻井保・節子夫妻、内田伸彦・誓子夫妻と息子の崇法さんが途中の交通事故の影響で午後9時に到着。大倭会館で一泊され、29日教務本庁で杉本順一さんと歓談されました。群馬の皆さんにも、青森の高橋さんからのプレゼントを持って帰っていただきました。

4月4日〜5日 F I W C のメ

ンバーで交流の家で資料整理を行いました。

4月6日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

午後4時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で行われました。

午後6時半から大倭会館で倭の会が開かれました。

3月18日 大倭墓地で墓前慰霊祭が執り行われました。

4月1日 午前10時半より令和8年度4月の辞令交付式が行われ、その中に新卒採用者2名の初々しい姿もありました。

3月15日 会議室にて映画「ひ

やくえむ」を上映、普段アニメを好まない方からも「今日のは面白かったわ」「こういうのやったらアニメも見たい」などの声をもらいました。

4月6日 お花見をしながらの昼食会を行い、桜やチューリップなどを見て「綺麗やね」「もう散ってきているなあ」など話をしながら楽しみました。

3月14日 利用者と一緒に紙コップに切り目をいれ毛糸を巻いていく作品を作りました。

4月5日 日常活動室にてカラオケを行いました。多数の方が参加され、演歌からJポップまで歌いました。

(長曾根寮)

3月17日(デイ) 色紙のチューリップを皆さんと一緒に作りました。

3月30日〜4月2日(特養) 玄関前で桜鑑賞を行いました。移動が困難な方はベランダから鑑賞しました。

3月14日 ホワイトデーでおよつ時にクッキーが用意され、男性職員から女性入居者へ手渡ししました。最後に記念撮影を行いました。

4月1日 茂毛路園創立18周年という事で、昼食にお祝いの豪華なお食事(創作料理)が提供されました。

「……をお見せいただく一幕があった。

あとは宇佐や壇ノ浦や美日に寄って、長い新婚旅行から帰ってきた。高千穂の一時以外、晴天続きに思ってもらったことに感謝であった。帰ってきてすぐに、九州での梅雨の再開が報じられていた」です。

追記 全3回がようやく終わりました。かなり短縮して記すことになり、何を削るか考えさせられた寄稿でした。(大倉)

編集後記

紫陽花邑の桜を今年は長く見せてもらいました。3月20日過ぎから少しずつ咲き始め、須佐の緒祭には桜の花はもう無いだろうと思っていましたが見ごろを少し過ぎたぐらいできれいに咲いていました。(のん)

あんない

- *月次祭(大倭神宮) 5月6日(水) 午後2時より大倭神宮にて。
- *大倭会主催祝会 5月10日(日) 午後2時より大倭神宮にて。
- *月次祭(大倭神宮) 5月15日(金) 午後2時より大倭神宮にて。
- *月次祭(大倭大宮) 5月23日(土) 午後2時より大倭大宮拝殿にて。

3月号お詫びと訂正

「こもれる魂魄の地を訪ねて」3段目14行目から、正しくは、

第354回大倭会文化行事 ～中之島バラ園と大阪天満宮～

日程 令和8年5月24日(日) 雨天決行
集合 大阪証券取引所 1階ホール 午前10時30分(大阪メトロ堺筋線北浜駅。京阪北浜駅すぐ上)

交通 学園前9:47発 近鉄奈良線(快速急行) 神戸三宮行き→近鉄日本橋10:14着、日本橋10:21発 大阪メトロ堺筋線(準急) 京都河原町行き(2番線)→北浜10:26着(北側改札口を通過してエスカレーターで地上1階へ)

行程 証券取引所→(徒歩約1分) 中之島バラ園→(徒歩約15分) 大阪天満宮→(徒歩約15分) 日本1長い天満橋商店街をぶらぶら、大阪環状線天満橋駅で解散。

問合せ 林 修三 080-2527-0840



計報 令和8年4月4日、長年ボランティアグループ「あじさいの箱」の代表として大倭の福祉事業等を支えていただけて、社会

福祉法人大倭安宿苑の評議員も務めたことのある、三重県名張市在住の目田容子さん(85歳)が御帰幽されました。令和3年7月号の本紙「寸紗」第144回にも登場されています。